

障害児の読書応援、212 作品デジタル書籍化 全国に寄贈（東京の財団）

視覚障害や知的障害があつて読書の機会が限られがちな子供たちに、さまざまなサポート機能を備えた電子図書を通して本を読む楽しさを届ける試みが広がっている。子供の読書支援を続けてきた伊藤忠記念財団（東京都港区）のスタッフらが、紙の本を一冊一冊電子化したり、有志の劇団員らがボランティアで音訳したりして協力している。デジタルの本に、地道な作業を積み重ねる人々のぬくもりが詰まっている。

「にっぽんいちの きびだんごを わけて ください」。10 月初め、肢体不自由児や知的障害児らが通う都立墨東特別支援学校（江東区）小学部の教室に、4～6 年の児童 9 人が電子図書を使いながら「桃太郎」などを思い思いのペースで音読する声が満ちていた。担任の河野聡美教諭（25）によると、授業に電子図書を活用し始めて今年で 3 年目。「一人一人の音読速度や内容の理解度が随分上がった」といい、子供たちからは「デージーやりたい」という催促が絶えない。

「デージー」とは、誰もが本を読めるよう設計された国際標準規格の情報システム「マルチメディア DAISY」。文字の拡大や音訳、自動めくりのほか、読んでいる部分だけ色が変わる「ハイライト」機能もある。全盲や弱視、文字を順番に追うのが難しい

知的・学習障害、ページをめくりにくい肢体不自由など、さまざまな障害児に読書の道を開く。

財団がデージー型電子図書の普及に乗り出したのは 2011 年。電子図書普及事業部長の矢部剛さん（54）によると、視覚障害以外にも紙の本が読めない障害児が多くいることを知ったことがきっかけだった。財団スタッフが紙の本を裁断してスキャナーでコンピュータに読み取り、音訳ボランティアや劇団員らによる感情のこもった朗読を録音する。雑音除去や、朗読とハイライトの進行速度を合わせる「ひも付け」も手作業だ。「1 時間で読める本なら 50 時間かけ、やっと 1 冊分の CD ができる」という。

「わいわい文庫」と名付け、2012 年度から全国の特別支援学校や図書館へ寄贈した CD は今年 9 月現在で 212 作品、延べ約 2,700 か所を数える。肢体不自由の少年は「本を持てずページもめくれないから諦めていた。これなら僕も読める」と喜んでくれた。音訳で読書する重い脳性まひの娘を見て、両親は「こんなに楽しそうな姿は初めて見た」と感激した。そんな姿が、スタッフのやりがいにつながっているという。矢部さんは「寄贈を希望する学校や団体はぜひ声を上げて」と話している。問い合わせは同財団（03・3497・2652）。

（毎日新聞・東京（夕刊） 2015 年 11 月 7 日）